



山崎正和著作集



おんりい・いえすたでい'60s

中央公論社

山崎正和著作集 11

定価三二〇〇円

昭和五十七年五月十日印刷
昭和五十七年五月二十日発行

著者 山崎正和

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替東京二一三四
©一九八二 検印廃止

I

おんりい・いえすたでい
'60s

序論・愛憎交々の十年

自己の位置づけを求めて

「不定愁訴」の時代

「時代は変わった、紅茶にソネット」

猿に帰った食生活

ながら族とついで族

「無責任」と「無限責任」の逆説

ブラック・ボックスの皮肉

ヤング・オア・ヤング・アット・ハート？

キザがムキにならない時代

祭りと演出家の時代

口ごもる動乱期

ブームとゲリラの時代

フロアの情報からストックの情報へ
新しい歳時記

「ナウ」な時代の不安と楽しみ

あとがき
193

II

現代の神話

はじめに——片はしから疑ふこと
199

「清潔派」主義——大衆 (一)
202

「判官びいき」の変質——大衆 (二)
204

地方自治のムダ——反国家 (一)
207

「市民」といふ立場——反国家 (二)
210

「多数決」の暴力——民主主義
212

「脱亜」と「興亜」——アジア
215

「死にがひ」の喪失——生命尊重 (一)
217

氾濫する疑似冒険——生命尊重 (二)
219

エコノミック・アニマル——自然保護 (一) 222

「未開に帰れ」？——自然保護 (一) 224

「世代断絶」の被害者——若さ (一) 227

「父ちゃん坊ちゃん」——若さ (一) 230

「働きすぎは悪」の論理——レジャー (一) 232

空白な時間——レジャー (一) 235

「人生」の手ごたへ——行動 (一) 238

「男は黙って……」——行動 (一) 240

「行き先」のない脱出——脱 (一) 243

「反体制」の構造——脱 (一) 246

「情報」といふ騒音——情報 (一) 248

「情報」のねだん——情報 (一) 251

「ポルノ」論争——性 (一) 253

結婚と「両性の合意」——性 (一) 256

教師の幻想——教育 259

曲り角で考へる

一 情報化社会とつきあふこと 262

- 二 労働と怠惰のあひだで 270
- 三 曲り角の感情教育 279
- 四 豊かさへの模索 294

III

論壇時評

- 一九七〇年三月 311
- 一九七〇年六月 317
- 一九七〇年九月 323
- 一九七〇年十二月 329
- 「国際交流基金」の宿命 336
- 大衆社会のなかの小さな声 340
- 石油危機のもうひとつの教訓 344
- 寛容とじだらくの間 348
- 都市に住む心 352

日本の旅と現代の交通
356

『中央公論』巻頭言 360

書誌
374

山崎正和著作集

11

おんりい・いえすたでい
'60s

おんりい・いえすたでい
'60s

序論・愛憎交々の十年

自己の位置づけを求めて

「不定愁訴」の時代

「時代は変わった、紅茶にソネット」
猿に帰った食生活

ながら族とついで族

「無責任」と「無限責任」の逆説

ブラック・ボックスの皮肉

ヤング・オア・ヤング・アット・ハート？

キザがムキにならない時代

祭りと演出家の時代

口ごもる動乱期

ブームとゲリラの時代

フロアの情報からストックの情報へ

新しい歳時記

「ナウ」な時代の不安と楽しみ

あとがき

序論・愛憎交々の十年

アンビヴァレンス

「ほんの昨日」のこと

最近、一九六〇年代といふ時代が、私の目に奇妙に鮮明に、ひとつの「時代」として像を結び始めたやうな気がします。

それはひとつには、私自身が四十歳代にはいって、自分の青春がやうやく「過去」として見え始めた、といふことかもしれません。思へばあの十年間に、私は二十代後半から三十代の前半を過ごしたことになる、最初の本を世に出したのも、一回目の外国生活を経験したのも六〇年代の初頭でした。「六〇年安保」に始まり、「沖繩返還」に終るあの激しい時代は、いはば私にとって、「実生活」の手習ひをしながら眺めた毎日の風景だったのです。

けれども、一方ではさうした個人的な事情とは関係なく、どんな歴史上の十年間でも、それが終わってから五年余りもたつと、ひとつの「時代」として見え始めるものかもしれません。

アメリカの新聞記者、F・L・アレンの書いた、『オンリー・イエスタデイ』（藤久ミネ訳・研究社刊）と

いふ現代史の傑作がありますが、これは、早くも一九三一年の時点で一九二〇年代を振り返った記録でした。しかし、私にとっては、十年といふ時間が完結した過去として見えるためには、どうやらそこからの距離として、その半分に余る歳月が必要だったやうです。そして、ひとつの過去が「ほんの昨日」として鮮かに見えるためには、おそらくその始まりから数へて十五年余といふ時間が、許される最大限の距離にちがひないのです。

ふとした機会にこのアレンの本に目を通したとき、私にははかに、私の六〇年代が、「ほんの昨日」のこととして活き返るのが感じられました。それはまづ、アレンの二〇年代が、社会現象の点で、私の六〇年代にあまりにも似てゐたからでもありません。

「戦争は終わった」「短いスカート」「若い世代の放埒」「自動車の隆盛」「セールスマンの全盛期」「繁栄の成果」「誇大宣伝時代」「知識人の反乱」。そして、「ふるさと、なつかしきフロリダ」「農地・郊外・高層ビルのブーム」と続くのが、『オンリー・イエスタデイ』の見出しです。

「戦争は終わった」を「戦後は終わった」に置きかへてみれば、日本の六〇年代は、まさにこの見出しで過不足なく覆はれてしまふやうです。

一九二〇年の七月、ある服飾評論家は『ニューヨーク・タイムズ』紙に、「アメリカの女性は……：慎しみの限度をはるかに越える短いスカートをはいている」と書いた。言い換えれば、裾が地面から七インチのところまで上ったわけだ。スカート丈は一九二〇年秋から二一年冬にかけて、再び長くなるだろ うと言われていたが、実際には、下がるどころか、さらに破廉恥に数インチ短くなった。生意気な小娘たちは、薄もののドレスや半袖、時には（夜に）袖なしを着た。放埒な若い娘たちは、靴下を膝下までまき下ろし、脛の骨や膝頭をちらちら見せて、有徳の士を啞然とさせた。（中略）あまつさえ、彼女たち

のなかには、コルセットを着けない者までいる。「コルセットなんか着けてみると、男の人が踊ってくれないわよ」というのが、彼女たちの言い分であった。

このアレンの報告を読んで、一九六六年の後半から始まった「ミニ・スカート」の流行を思ひ出さない人はないでせう。膝上十センチのスカートが、たちまち二十センチに跳ねあがり、駅の階段などでは、お尻を紙の買物袋で隠して登る女性が目立ちました。二〇年代とは違って、六〇年代の世論はこの流行にいたって寛容でしたが、それでも、これは足の太い日本女性にはむりだと考へて、たちまちその予想を裏切られた評論家は多かったです。やがて、コルセットならぬブラジャーを否定する女性も現はれ、「薄ものドレス」を極端まで進めた、「シー・スルー・ルック」などといふ流行も見られました。また、六〇年代の日本の家庭には大量に電化製品が導入され、罐詰や冷凍の既製食品が提供されて、家事労働は大いに節減されましたが、この変化の完全な雛型もまた、アメリカの二〇年代に見られたやうです。

参政権よりもっと顕著なことは、女性がわずらわしい家事から解放されるようになってきたということである。小住宅が建てられるようになり、手間がかからなくなった。アパートに移る家族も現われた。アパートはなお一層、主婦の時間と労力を省いた。女性たちは食事の仕度をもっと手軽にする方法を工夫していた。罐詰の売れゆきはふえていたし、調製された食品を売るデリカテッセンの数は、一九一〇年から二〇年にかけての十年間に六〇%も増加した。パン屋がつくるパンの生産量は、一九一四年から二四年の十年間に六〇%も増加した。(中略)洗濯屋の利用率は、一九一四年から二四年のあいだに五七%もふえた。家庭で洗濯する際には、電気洗濯機と電気アイロンが、女性の省力化に一役かった。(中略)主婦は、電話で買い物の注文をし、既製服を買って洋服をつくる手間を省き、真空掃除機を買っ